

TPR 日本語初級授業における 文法事項の配列の特徴

川 口 義 一

0. はじめに

本稿は、TPR (Total Physical Response) のテクニックを日本語初級授業に応用した実践記録を分析し、TPR による授業での学習文法事項の配列を、従来の「文法中心」型の教授法によるそれと比較して論じ、その特徴を記述しようとするものである。

1. TPR 採用への経緯

早稲田大学語学教育研究所(以下、「語研」と略す)日本語専修課程では、1985年度および1986年度前期の初級日本語クラスの一つにおいて、15週(約225時間)の集中日本語授業の一部にTPRのテクニックを応用し、極めて良好な成果を修めた。このクラスは、どちらも「日本語専修課程GO2」といい、語研が独自に募集している日本語専修生のうち、プレイスメントテストにより初級の最も基礎的なレベルから学習を始める必要のある者を集めたクラスで、前期15週の間に語研編「外国学生用日本語教科書初級」(以下、「語研初級」と略す)の第1課から第40課までを終了し、後期は中級へ進むことが予定されているものである。学生の構成は「非漢字系初学者・未習者+漢字系未習者」の混合クラスで、1985年度はアメリカ人3名、ドイツ人・タイ人各2名、フランス人1名に韓国人4名の計12名、1986年度はタイ人(華僑系)、マレーシア人(華僑系)、中国人、ハンガ

リー人、フィリピン人各1名ずつ計5名に、それぞれなっている。

TPR 導入以前のこのレベルのクラスは、教科書の構成に従って学習を進めていった。「語研初級」は、各課ごとに「本文」と「練習」とに別れた構成になっているが、「練習」の部分は、特定の文型を代入・変換ドリルのやりやすいように図示したもの (pp. 75-76 図1 参照) であり、「本文」の部分は、「練習」で提示された文型が使用できるような文脈の会話文または文章であるなど、オーディオ・リンガル方式の教授法を前提として作られた教科書であると言える。したがって、文型の配列もいわゆる「文法中心主義」的特徴を持っており、基本的に形態論的・構文論的・意味論的に単純なものから複雑なものへという配列のしかたになっている。たとえば、連体修飾句を持つ文は単文より前の課で扱われ、受身・敬語などは教科書の終わり近くになって出てくるというような配列である (pp. 77-78 表1 参照)。

学生の立場からこの配列を検討してみると、始めのうちは楽だが後でつらくなってくるという構成になっていることになる。過去の教授経験からみても、第25課から第35課にかけて「アゴが出てくる」学生が目立ちはじめて進度が遅れだし、第38~40課は未習のまま前期を終了することが少なくない。また、「語研初級」は、初級レベルのものとしては漢字語彙数が多く本文の文章も比較的長いため、非漢字系の学生が多いときは学習進度がさらに遅れることもある。従来、非漢字系の学生が多い「GO 2」レベルのクラスが「語研初級」の全課を終了することは困難であり、進度を速めて全課を終了してみると、学習項目の習得が中途半端なまま中級に進み中級の授業内容が理解できない学生が出てしまうという矛盾が指摘されていた。特に、1984年度の「GO」クラス¹⁾では、進度の遅れが回復できず、前期終了時までに第30課まで到達できないという事態を招いている。

1985・6年度の「GO 2」へのTPR 応用は、語研専修課程初級レベルでの上述のような問題に対処するために試みられたものであり、オーディオ・リンガル方式以外の教授法の実践実験でもあった。ただし、すでに教

科書とその周辺教材(文法解説・対訳単語帳・練習帳など)が整っているため、そして従来の教授実践がまったく効果のないものとも思われないため、今回の実験は、オーディオ・リンガル方式を完全に否定するものではなく、その短所を補う形で行うこととした。TPR がオーディオ・リンガル方式を補うものとして今回の実験の対象となったのは、それが他の教授法と併用できる可能性を持つと思われるためである。もし、サジェストペディアやサイレント・ウェイを教授法として取り入れるとなると、教科書・教材を始めカリキュラム全体を作り直さなければならなくなるうえに、教師も一定の訓練を受けなければならなくなってくるが、そのために必要な時間や人員は確保できないのが現状である。また、すでに TPR の教授効果について肯定的な実践報告がある²⁾のも TPR 採用を決定する要因となった。

2. TPR 応用の実際とその効果

次に、1985-6 両年度の TPR 応用の方法を略述する。

「GO 2」は、一日 2 時限(1 時限は 90 分)の授業のを週に 5 回行うインテンシブ・コースであるが、各授業時間のうち平均 20 分前後を TPR 方式の文型練習に費やし、残りの時間は、オーディオ・リンガル方式の文型練習などで教科書の構成に従って授業を進めた。時間内のどこの部分に TPR を導入するかは、同クラスの担当教師個人³⁾に任されたが、TPR 練習の方法に関しては、次のような基本方針を立ててこれに従うこととした。

- ① TPR 方式の練習で取り扱う文型や語彙は、教科書での提出の配列に従わず、専用の配列表(第 4 節参照)に従って導入する。
- ② 入門期の発話練習は一定の条件が整うまで行わないという TPR の標準的な方法⁴⁾に従わず、早い段階から学生の発話を促す⁵⁾。
- ③ 学生の心理的負担を減らす⁶⁾ため、TPR 方式の練習の部分についてテストや宿題による理解度のチェックをしない。

方針 ① が今回の TPR 応用上の主要な特徴であり、小論のテーマとなるところでもあるので、第 3 節以降で詳述する。

以上のような方法による TPR を応用の効果を、前期 15 週の日程が終了した時点(1985-6 年 7 月)で検討してみると、次のようなことになる。

(1) TPR 練習のために作成した文型配列に従うと、特定の語彙・文型が、教科書で導入される以前に TPR 練習で事実上導入済みであることが多い(この点については、次節参照)ため、新しい語彙・文型の導入にかかる時間が短縮される傾向⁷⁾が顕著であった。

(2) 学生の聴解力が著しく伸びた⁸⁾。これは、TPR 導入の結果として当初から予想されたことであったが、予想以上に顕著な結果となった。第 10 週に入るところには、教師があまり語彙をコントロールせずにノーマル・スピードで話しても、ほとんどの学生が教師の指示や説明を理解できるようになっていた。

(3) (1) (2) の効果の相乗作用により、教師の指示、練習のための場面設定、語彙・文法関係事項の解説などの理解が速くなり、授業の進度が驚異的に速まった。第 7 週から第 10 週にかけては、TPR 練習をせず例を挙げて口頭で説明するだけで意味の理解できる語彙や文型が増えてきた。こうして、15 週の時間的制限の中で教科書の第 1 課から第 40 課までがほとんどカバーできたうえ、授業中の時間配分にも余裕ができた。この時間的余裕は、スピーチ練習・外来語の学習・漢字の書き方指導など従来のクラスでは十分に行われなかった授業活動を可能にした。

以上のように、初級の集中コースにおいて TPR 方式の練習方法は望ましい効果を生んだと言える。この効果は、もちろん学生の学習動機が高いこと、教科書の周辺教材(文法解説・対訳単語帳・練習帳など)が揃っていることに支えられて出てきている面はある。しかし、これらの条件は 1985-6 年度だけのものではない。両年度前期の成功は、やはり TPR の枠組みを応用実践したことによって求められてよいであろう。

3. 文型配列上の相違

今回の TPR 応用の練習形態において、従来の教授法ともっとも大きく異なる点は、学習項目の配列のしかたであろう。初級レベルでは、文法項目が「文型」の形式で提示されている教材が多いが、「語研初級」もこのタイプの教科書で、その文型配列は表 1 (pp. 77-78) に示したとおりである。一方、1985-6 年度の TPR 練習の文型配列は、それぞれ表 2 (pp. 79-80)・表 3 (pp. 81-82) のとおりである。

表 2・表 3 は、それぞれ 1985-6 年度の「GO 2」クラスの学習進度表⁹⁾であるが、左端の数字は第何週目かを表し、右側へ続く上下の欄は上が教科書の進度、下が同じ日の TPR 練習で扱う文型を示したものである。この表によれば、例えば、1985 年度前期第 1 週の最初の日は 4 月 8 日であり、この日の 2 時限の授業時間 (計 3 時間) の中で教科書の第 1 課を終了し、TPR によって[~シテクダサイ]という文型が導入されたということが分かる。そして、表 1 を見れば、「語研初級」第 1 課の主要文型は[~ハ~デス / ジャアリマセン]であることが分かる。このように、表 2・表 3 と表 1 を組み合わせて見ていけば、教科書と TPR 練習での文型配列の相違と関係が読み取れる。以下、論点を明確にするために、表 1 と表 2 の文型配列の相違にしばって¹⁰⁾検討してみよう。

表 2 の TPR 練習での文型配列に見られるもっとも顕著な特徴は、ほとんどの文型が教科書での提示順より早い機会に導入されていることである。例えば、[~テクダサイ]は、第 1 週の一日目導入されるが、同じ文型が初めて登場する教科書の第 14 課の学習は、第 4 週に入ってからである。表 2 の各週の TPR 練習での主要文型について、初回導入の時期を教科書で扱われる場合と比べてみると、次のようになる。(< > の中が、当該の文型が扱われている教科書の特定の課を学習する週である)

第 1 週: ~テクダサイ <第 4 週>・~テ~テ <第 3 週>・~ナガラ <第 6 週>

第 2 週: ~ナイデテクダサイ <第 4 週>・~ニイル <第 2 週>・連体修飾句 <第 9 週>¹¹⁾・比較 <第 7 週>・~テイル <第 5 週>

- 第3週: ~タ<第8週>・~タイ<第7週>・~テイタダク<第15週>
 第4週: ~テモイイ / テハイケナイ<第9週>・~カドウカ(聞ク)<第11週>
 第6週: ~タリ~タリ<第7週>・~ンデスカ<第7週>・〔目〕ガ / ノ(背)イ
 (人)型の連体修飾句<第6週>
 第7週: ~テカラ<第6週>・伝聞の~ソウダ<第10週>・~タラ<第12週>
 第8週: 「迷惑」の受身<第14週>・使役<第11週>
 第9週: ~ナキャナラナイ<第9週>・~コトガデキル<第10週>
 第10週: 可能形<第10週>・(デキル)ヨウニ/コトニ ナル/スル<第10週>
 第13週: 条件の~ト<第13週>

以上のような文型提出順の相互関係は、初級レベルの学習対象になる文法項目の主要なものが、教科書で導入される前に、最低一度は練習されているという状況を作りあげる。このことは、文法項目の教科書での習得にとって非常に有利である。というのは、学生は TPR 練習をとおして当該項目の意味するところ(タツテクダサイならく立ち上がることについての依頼)だということをおおむね把握することができ、そのうえでその後、オーディオ・リンガル方式の代入練習や変形練習によって語順・形態変化などの構文論的・形態論的な面での正確さを中心に習得する機会を再び与えられるからである。従来のオーディオ・リンガル方式のみの文型練習では、この「意味と形式」を同時に習得し、かつその正確な形式を正確な発音でただちに生成させなければならないところに、学習者の心理的負担を重くする要因があったのである。今回の試みは、TPR 練習によって意味の理解と形式の受容をまず済ませ、その後教科書の「練習」で意味の確認と形式の生成を行ういうように、「意味と形式」の習得のタイミングをずらしたところに望ましい学習効果を上げるカギがあったと言えるであろう。

前記の文型提出順の比較一覧には、TPR 練習が教科書での練習と同じ週か、それより遅くなって行われているものもある。このうち、第2週の[~ニル]と第10週の[可能形]は、同じ週ながら教科書で扱われるより前の日に提出されており、「TPR 先行」の傾向どおりである。同一文型の

提出が TPR と教科書とで同じ週の同じ日になっている、第6週の[～ガ～イ～]と第10週の[(デキル)ヨウニ / コトニ ナル / スル]も、教科書「練習」のパターンプラクティスに入るまえに TPR 練習を済ませてある、第7週の[～テカラ]と第9週の[～ナキャナラナイ]は、導入というよりは復習のための TPR 練習という性格の強いもので、前者は主に[～テカラ～タリ～タリ]という形式の複合文型として練習され、後者は[～ナケレバナラナイ]の口語形の紹介を意図したものである。

前記の比較一覧には出てこないが、表2を見ると、教科書では扱われていない文型が TPR 練習の項目になっていることが分かる。第1週の[～(スル)マエ]・時間条件の[～タラ]¹²⁾、第5週の[～(スル)ヨウニ言ウ]、第10週の[コウイウ場合ニハ?]、第11週の[使役+ヨウニ言ウ]がその文型である。これは、「語研初級」にはないものの、中級レベル以前に習得しておいたほうがよく、TPR 練習自体にとっても便利な文型なので(この点については次節参照)、あえて導入したものである。このように、TPR 方式の練習を応用すれば、教科書の提出文型自体の不足を補うことも可能になるのである。

4. TPR 文型の配列について

前節では、1985年度の「GO 2」の進度表を対象に TPR 文型の配列と教科書の文型配列の関連を検討してみたが、本節では、TPR 文型の配列自体がどのような性格になっているかについて、1985年度の文型配列表を中心に解説する。

TPR 練習のための文型は、TPR の教授理念から考えて、具体的な動作や物体の操作によってその意味が示せるものから、次第に意味概念の複雑なものへと配列するのがよいはずである。その際、発話の時間が短く、学生が耳で捉えやすいものを配列の最初のほうに持ってくることは差し支えないが、「文法的に複雑」かどうかをあまり考慮する必要はないであろう。例えば、受身文や使役文は能動態の叙述文よりあとに提出するほうがよい

が、連体修飾句が名詞を修飾している構造を持つ文をずっとあとまで提出しないでおく必要はないということになる。1985年度の「TPR 練習用文型配列表は、以上の理念に基づき、具体的には Asher (1982) (〈参考文献〉Asher (1986) の第2版) およびその日本語への応用である「江東区中国帰国者日本語学級会」¹³⁾ の「TPR 文型配列表(1984年度のものを)を参考として筆者を含む担当教師(〈注〉3) 参照)が作成・修正していったものである。取り上げた文型は表2のとおりであるが、以下にいくつかの特定の文型の具体的練習を紹介しながら、文型配列の特徴を明らかにする。

文型配列の第1回目が「命令文」であることは、TPR 方式であるかぎり当然である。ただし、日本語の場合は動詞の命令形を使った表現が尊大な印象を与えるので、[～テクダサイ]または[～テ]の依頼文にする必要がある¹⁴⁾。「GO 2」は[～テクダサイ]を取り上げたが、この文型は以後新しい文型を導入するたびに使われることになる。例えば、第1週二日目の[～テ～テ]は、位置を表す名詞と形容詞を語彙として利用し、次のような指示によって導入し、練習する。

- A さん、青い紙を指さしてください。それから、白い紙を指さしてください。
その青い紙を取って白い紙の右に置いてください。
B さん、赤い紙を取って白い紙の左に置いてください。
C さん、黄色い紙を取って白い紙の上に置いてください。……

第2週三日目には、名詞が連体修飾句により修飾されている文型が導入される。これは、ミニチュアの動物と世界地図を使って次のように練習されるものである。

- (ミニチュアの動物をいくつか机の上に並べておいて)
A さん、アフリカにいる動物を指さしてください。
その動物を取って、地図のアフリカの上に置いてください。
B さん、アフリカにもインドにもいる動物はどれですか。
その動物を取って、地図のアフリカとインドの上に置いてください。
C さん、アフリカにもインドにもいない動物はどれですか。……

すでに練習されている[～テクダサイ]の文型と視覚に訴える情報を与え

れば、連体修飾句を配列の早い段階に置いて学生理解面での混乱はほとんど見られない。

第1週三日目には、「語研初級」にない[～マエ]と時間条件の[～タラ]が導入される。ともに連用修飾句を作る複文構造であるが、次のような指示のもとですぐに学生の反応を得ることができる(即ち、学生は指示どおりに行動する)。

これから、皆さのん名前を呼びます。私が名前を呼んだら、手を挙げてください。

Aさん、立ってください。立つ前に、「立ちます。」と言ってください。

立ったら、「立ちました。」と言ってください。

座ってください。座る前に、「座ります。」と言ってください。

座ったら、「座りました。」と言ってください。

(リンゴを切らせ、ようじをさして配らせる)みなさん、どうぞ、食べてください。

食べる前に、「いただきます。」と言ってください。

食べたら、「ごちそうさま。」と言ってようじを箱に入れて帰ってください。

帰る前に「失礼します。」と言って、おじぎをしてください。

[～マエ]と[～タラ]の二つの文型は、以後も動作への指示として別の文型導入の際に繰り返し利用される。このように、教科書にない文型でも後日の練習のために便利なものは積極的に導入し、あわせて自然に習得できるように配列した。

同様なことは第5週三日目の[～(スル)ヨウニ言ウ]についても言える。この週までには、教師からのノーマルスピードでの指示にはほとんどの学生が慣れてきて、聴解力を発話力に転移する準備もできあがるころである。この時期に発話に積極的な学生に指示を出させる役割を与え¹⁵⁾、口頭による文生成への意欲を助長するためには、次のような練習をするのが効果的である。

Aさん、Bさんにここへ来て、いすに座るようにいってください。

学生 A:Bさん、ここへ来て、いすに座ってください。

早い段階で導入された文型は、後の練習に利用されていくので、次第に

複雑な練習内容が可能になるわけだが、この積み重ねが後のほうに配列された、意味概念の把握がむずかしいとされる文型の習得を容易にしていけることになる。第10週三日目の[可能+ヨウ / コトニ]は、次のような指示によって提出されるのだが、その内容は既に単なる指示文ではなく起承転結を持つストーリーになっている。

Aさん、Bさん、ここに来て座ってください。これは、二人の家です。この家の前を毎日Cさんが通ります。Cさん、机の上のテープレコーダーをとって、この家の前を通ってください。そのときに、ボリュームをいちばん大きくして、音楽をかけながら通ってください。AさんとBさんは、それがとてもうるさいので、相談してさんを通らせないことにしてください。「通行禁止」のはり紙を机の上から持って来て、Cさんが通るときに見せてください。Cさん、「通行禁止」のはり紙を見せられたら、がっかりして戻って来てこのいすに座ってください。そのとき、DさんがCさんのところに来ます。Dさんは、Cさんにどうしたのか聞いてください。聞かれたら、Cさんは、「あそこが通れないことになったんです」と言ってください。Dさんは、それを聞いたら、AさんとBさんのところへ行って「Cさんを通らせてあげてください」と頼んでください。AさんとBさんは、相談して通らせてあげることにしてください。そして、「通行禁止」のはり紙を破いてください。はり紙が破かれたら、Cさんは、テープレコーダーを持たないでAさんとBさんの家の前を通ってください。それから、Dさんのところへ行って、「ありがとうございます。通れるようになりました」と言ってください。

このような長い指示¹⁶⁾も、A～Dの役にあたった4人の学生に動作をさせながら少しずつ導入していくと、ほとんど何の抵抗もなく反応していく。二度目に学生の組み合わせを変えてやらせてみると、教師の助けなしにほぼ指示どおりに繰り返すことができる。

以上のように、TPR練習文型の配列は、その文型の意味を実現する状況が学生にとってすぐ理解できるようなものを始めのほうに、そして先行文型の組み合わせで意味の提示が可能なものを後にして構成されている¹⁷⁾のである。

5. まとめ

本論では、1985-6年度の初級日本語クラスへのTPR応用の実践記録を基にして、TPR方式の教授法での語彙・文法事項の配列が、オーディオ・リング方式のそれと比べてどのような特徴を持つか述べた。今後さらに異なる配列による応用実践を続け、初級レベルでのTPR応用のもっとも効果的な方法を摸索したいと思っている。

最後になったが、1985-6年度の「GO 2」担当教師、竹田恵子・中村一郎・小宮千鶴子の各氏、および「江東区中国帰国者日本語学級会」の北上泰子氏からは、本稿をまとめるのに必要な情報を提供していただいた。記して感謝の意を表するものである。

註

1) 事務上のつごうによって違う名称になっているが、「GO 2」と同じレベルの初級クラスである。

2) 〈参考文献〉のカネギ (1984), Schulte=Pelkum (1985), Asher (1985) 参照。

3) 85年度は3名、86年度は4名。うち筆者を含む3名が同一人物である。

4) 〈参考文献〉の Asher (1985) Part 2 p. 4, Part 2 pp. 17-19 参照。

5) このために発音練習の一部にベルボ・トナル法 (Verbo=Tonal Method) を応用した。TPRを採用したうえで、聴解力の発話力への転換を速める工夫の実践例については、Schulte=Pelkum (1985) pp. 78-80 参照。

6) 〈参考文献〉の Krashen & Terrell (1983) における 'lowering affective filter' の概念 (同書 p. 38, p. 58 参照) からヒントを得ている。

7) 同様の傾向が Asher (1986) Part 3 p. 4 にも報告されている。

8) 聴解力は、発話力より先に伸びるので、この時点でも聞いて分かることのすべてを口頭で再生することができるわけではない。TPRにおける発話力と聴解力の関係については、〈参考文献〉の Asher (1986) Part 2 pp. 3-4 参照。

9) 本論のものは、進度予定表ではなく実際の進度の結果を記した進度記録である。

10) 1985年度と1986年度のTPR導入上の相違については、稿を改める。一部の相違点については、〈参考文献〉の竹田 (1987) を参照。

11) [~(スル)トキ]のような文型も、「語研初級」では連体修飾句として扱われている。「語研初級」p. 277の「練習」参照。

12) 「これから、名前を呼びます。自分の名前が呼ばれたら返事をしてください」のような場合の[タラ]を、便宜上こう呼ぶ。「もし、間違って返事をしたら」のような場合の[タラ]は、「語研初級」第33課で扱われている。

13) 東京都江東区枝川区民館で開かれている区立の日本語学級で、中国からの帰国者を対象にした日本語教育を行っている。ここでは、1984年度から一部のコースで TPR を主たる教授法に採用したクラスを設け、好ましい成果を収めている。

14) 米国カリフォルニア州マウンテン・ビュー市にある“Language Pacifica”という語学学校の TPR・サジェストベディア併用の日本語クラスでは、[～テ]を依頼文型に採用している。

15) Asher (1986) では、“role reversal”と呼ばれるテクニックである。同書によれば TPR だけの教育でも、授業開始後 10-20 時間のうちに発話の準備 (readiness) ができる学生が見られるとのことである。(同書 Part 3 p.7 参照)

16) 指示を長くしていくことによって、聴解力の伸長をはかるだけでなく、練習の内容をより“meaningful”(認知主義教授法での概念)にすることができる。

17) ディーラー他(1980)では、TPR の文型指導の可能性を「問題解決」(problem solving) の教授理念に沿うものとして、理性主義の立場から好意的に評価している。

〈参考文献〉

ASHER, James J. 1986. “Learning Another Language through Actions” (third edition) Sky Oak Production

——. 1985. ‘Total Physical Response: Some Guidelines for Evaluation’ « The Language Teacher » vol. IX No. 13

ディーラー (DILLER, Karl C.), 鳥居次好, 佐々木昭共著・1982・『言語教育における理性主義と経験主義—神経言語学の示唆するもの』・大修館書店

カネギ, ルース・1984・「TPR による言語教育」(部分)・日本語教育学会《学会ニュース》第 31 号

KRASHEN, Stephen D. & TERRELL, Tracy・1983・“The Natural Approach—Language Acquisition in the Classroom”・Pergamon / Alemany

SCHULTE=PELKUM, Rudolf・1985・‘How Total Physical Response Can Be More Attractive: A 36-Hour TPR Course in German at the Goethe-Institute, Tokyo’・« JALT Journal » vol. 7, No. 1

竹田恵子・1987・‘Research on Effects of TPR on Japanese Language Acquisition for Beginning Students’・« ILT ニュース » 81

I.

(図 1)

1. a.

この 人 山田先生 男の かた	は	医者 英語の 先生 田中さんの おとうさん	で,	あの 人 山本先生 女の かた	は	学生 日本語の 先生 おかあさん	です.
これ それ こちら あちら そこ あそこ		ノート もの 本 富士山 文学部 講堂 田中さんの へや		それ あれ そちら こちら あそこ ここ		じしょ さくらの 本 北アルプス 教育学部 図書館 山田さんの へや	

b.

この あの	人 かた 先生 女の 人	は	医者 英語の 先生 田中さんの おとうさん 早稲田大学の 学生	で,	わたしの 友だち あの かたの 友だち 早稲田大学の 先生 田中さんの おくさん	です.
----------	-----------------------	---	--	----	---	-----

2. a.							
夏	は		て,	冬	は	さむい	です。
冬				夏		あつい	
春		あつく		秋		すずしい	
秋		さむく		春		あたたかい	
この 町		あたたかく		あの 町		さむく	ない
東京		すずしく		ニューヨーク		あつく	ありません。
田中さんの 国				金さんの 国		すずしく	
わたしの うち				大学		あたたかく	
この 店				あの 店			

(注) 「語研初級」の第15課「練習」の一部 (p. 155) を抜き出したものである。

(表 1)

課	主 要 文 型 ・ 語 彙
1	-ハ・モ-デス / デハ・ジャアリマセン -ハ-デスカ ナニ・ドナタ
2	コノ・ドナタノ・ドコノ・ナンノ- 1-100
3	-ハ イ-Adj. デス タイヘン・アマリ ドンナ- 色名
4	-ハ ナ-Adj. デス
5	-ハ Vマス / マセン -ハ Vマスカ マイパン -ジカン -ジ
6	-ハ-ヲ・モ-マス -ハ-ニ-マス マイアサ タクサン -ト-
7	-デ-マス -ジ(ゴロ)-マス イツ デモ・ヘモ・ニモ 日付
8	-ハ-ニアリマス・イマス ドコニ 位置 ハイ、-マセン 人数
9	-ニ-ガアリマス・イマス ナニカ・ダレカ ナニモ・ダレモ -ニハ
10	-ガ-マス -ハ-ガ-マス あいさつ ヒトツ・フタツ...
11	キノウ-マシタ -モ-モ 時間副詞句 疑声・態語
12	イ-Adj. タデス / ナ-Adj. デシタ(否定文) マダ・モウ
13	-テ-マス -ニノリマス / -ヲオリマス -カラ-マデ 時刻
14	-テクダサイ / クダサイマセンカ -ナイデ -マシヨウ アゲマス
15	-デ-デス -クテ-デス -ク/デハナクテ -デ/クテ-ナ/イ Adj.
16	ハヤク・シズカニ・ユックリ -ナサイ -モ-モ-モ
17	-テイマス カカリマス -ニハイリマス -ノホウ (2年) マエ
18	-ニ-ニイキマス -ニ-ヲカイマス -デ -ヲアルキマス
19	-ガ/ヲ ヒトツ -マス -ノ- (アカイ)ノ 助数詞
20	-ナガラ -テカラ -タリ-タリ -ソウデス -テ+やりもらい
21	-タリ-ナカッタリ -ンデス -テイマス (状態)
22	-ニ / クナリマス -(ガ)-タイデス
23	-ガワカリマス・スキデス -ヨリ-ノホウガ- イチパン・モット
24	-ハ-ガ-デス -テアリマス 親族名称(まとめ)

課	主 要 文 型 ・ 語 彙
25	-デショウ 用言の終止形 -トイマス 方角
26	-テモイデス -テハイケマセン -マデ ダロウ -ハジメル
27	-ナケレバ・ナクテハイケマセン 連体修飾句 -ニツイテ
28	接続詞 -シ-シ -カラ / -ノデ -ソウデス -テシマウ
29	可能形 -コトガデキル -ヨウニナル -コトニナル / スル
30	使役形 -ホウガイイ -ヨウニスル
31	-ハズ・ツモリ・ヨウ・ラシイデス -カモシレマセン -カ(シル)
32	-バ -バンダガ -ヨウデス(比況) -ガル ヨサ・ウツクシサ
33	-タラ(仮定) -ウトオモッテイマス -タコトガアリマス
34	-(ノ)ナラ バカリ -テクル・イク・シマウ・オク・ミル
35	動詞の自他 中止 -ト(条件) -デアル体
36	受身形
37	-ソウダ / ソウモナイ 命令形 バカリ ~的
38	敬語 書簡用語
39	敬語 (サシアゲル・イタダク・クダサル を含む)
40	-タバカリ -タメニ -マデニ -タビニ -トイウ -ニチガイナイ

(注)「語研初級」巻末(pp. 412-418)の各課配当文型・語彙一覧を1ページの表にまとめたものである。スペースの関係で本論の論旨に関係しない文型・語彙は割愛した。

(表 2)

1	4/8-4/12	L1	L2	L3 VTR7	VTR1/2	L4 VTR6
		-テクダサイ	-テ-テ 位置 形容詞	-ルマエ -クラ	***	-ナガラ
2	4/15-4/19	L5 VTR5	L6 VTR5	L7 VTR3	VTR3/4	L8 VTR4
		-ナイデクダサイ	-ナガラ-ナイデ-	ニイル Np 比較	***	-テイル人
3	4/22-4/26	L9-10	L10-1 VTR5	L12	VTR5/6	L13 VTR11
		-タ人	-タイ人	-ト思ウ人	***	-テクダサイ マセンカ
4	4/29-5/3	祝 日	L14 VTR13	L15 VTR11	VTR10/26	祝 日
		***	-テモイイ・イケナイ	-カドウカ聞ク	***	***
5	5/6-5/10	祝 日	L15-6	L46-7	VTR11	L17-8
		***	復 習	-ル・ナイヨウニ言ウ	***	-ルトキハ?
6	5/13-5/17	L18 VTR9	L19	L19-20	VTR9	L20 VTR27
		キノウ-タ Np	-ノヲ-スル	-タリ-タリ-ノカ?	***	-ガ/ノ Aj 人
7	5/20-5/24	L21	L21-2 V18	L22 VTR15	VTR8/12	L23 VTR8
	チャンピオンの あいさつ開始	-テカラ-タリ-タリ	コウイウ場合ハ?	-タイノダソウダ	***	-タラ?ヲ-タイカ
8	5/27-5/31	L23-4	L24	L25	VTR12 復習	L25
	スピーチ開始	受身(迷惑)	受身+タラドウスル	使役+ヤリモライ	***	***

9	6/3-6/7	L26	L26	L27	VTR18/21	L27-8
		受身・使役・復習	-ニヨルト-ダソウダ	-ナキナラナイ	***	-コトガデキル
10	6/10-6/14	L28 VTR17	L28	L29	VTR19	L29
		***	可能・デキル	可能+ヨウ/コトニ	***	***
11	6/17-6/21	L30	L30	L31	VTR17/28	L31
	チャンピオンの インタビュー開始	使役+ヨウニ言ウ	***	***	***	***
12	6/24-6/28	L32	L32	L33	VTR16/22	L33
		***	***	***	***	***
13	7/1-7/5	L34	L34	L35	VTR22	L35
		***	***	-ト-	***	***
14	7/8-7/12	L36	L36	L37	VTR24/25	L37
		***	***	***	***	***
15	7/15-7/19	L38	L38	L39	終了試験	L39
		***	***	***	***	***

(表 3)

1	4/7-4/11	L1	L2	L3	復習 1/2	L4
		-テクダサイ	-テ-テ 位置 形容詞	-ルマエ -タラ	-ナガラ	-ガ 好キナ人
2	4/14-4/18	L5	L6 復習 4	L7	L8 復習 7・4	L8
		-ナイデクダサイ	-ナガラ-ナイデ-	ニイル・ニアル Np	-テイル人	-ニイル Np ハドレ?
3	4/21-4/25	L9	L9-10	L11	L12 復習 11	L12
		テイル Np ハドレ/ ナニ?	-テイタ人ハドレ	-ルト思ウ人	-タイ人	-タト思ウ人
4	4/28-5/2	L13	祝 日	L13-14	L14-15	L15 復習 13-5
		-タイ・-ルト思ウ	* * *	-テモイイ・イケナイ	-クダサイマセンカ	* * *
5	5/5-5/9	祝 日	L15	L16	L16	L17
		* * *	-カドウカ(スコシ)	-ル・ナイヨウニ言ウ	-ルトキニツカウ	-タリ-タリシテ
6	5/12-5/16	L18	L18	L19	L19	L20
		-テカラ-タリ-タリ	キノウ-タ Np ハ?	-タリ-タリシタ人	-ノハイクラ?	* * *
7	5/19-5/23	L21	L21	L22	L22	L24
		-ナガラ-タリ-マリ	-ナガラ-タリ-タリ	-タママ-タリ-タリ	ドウシタンデスカ?	モット・モウスコシ
8	5/26-5/30	L24	L24	L25	L25	L25
		-タラ-スル	-タラ-タリ-テカラ	-ナンデス デハ-	-スルヨウニイウ	活用復習

9	6/2-6/6	L26	L26	L27 復習 26	L27	L27
		***	-ラレクラ-トイウ	-テイル(結果)	-ナケレバ?ナクデモ	***
10	6/9-6/13	L28	L28	L29	L29	L29
		***	***	***	-テアゲル・モラウ	コトニスル・ナル
11	6/16-6/20	L30	L30	L31	L31	L31
	チャンピオンの あいさつ開始	***	-サセル・-ナサイ	-カ-カキク	***	使役・可能+コトニ
12	6/23-6/27	L32	L32	L33	L33	L33
	スピーチ開始	-レバイイデスヨ	***	***	***	-クラドウスル?
13	6/30-7/4	L34	L34	L35	L35	L35
		***	***	***	***	-ナラ-トイイ
14	7/7-7/11	L36	L36	L37	L37	L37
		-サレテ-デキナイ	***	***	***	***
15	7/14-7/18	L38	L38	L39	L39	L39 終了試験
		***	***	***	***	***